

鷹巣誠一作 「In The Beginning」

- (効果音) (列車の中)
- 木村ゆかり (モノローグ) 外は寒そうだなあ。これからどうしよう。家を飛び出したのはいいけど、行く当てもないし、かくまってくれる友達もないし。それに... 高校の入試まであと1か月ちょっとしかないし...。やめたやめた。それがイヤで家を飛び出してきたんじゃない。どうかしてるわ。
- ナレーション 木村ゆかりは中学3年生。お聴きのとおり、お正月早々だというのに、高校受験のことで母親とケンカして家出をしてしまったのです。
- ゆかり(モノローグ) 高校か...。何で高校なんてあるのかしらね。あんなものなければ、わたしだってこんなに苦しなくてよかったのにさ。それにあの親よ。わたしの言うことにケチばかりつけて、全然言うこと聞いてくれないんだから。あの時だってそうだったわ。
- (音楽) (ブリッジ 回想)
- 母 ゆかり。あなた、どうしたの？ 2学期になっても全然成績上がらないじゃないの。今日担任の先生にいろいろとお話を伺ってきたのよ。
- ゆかり そんなこと言ったってしょうがないでしょ。わたしだって精一杯やったんだから。
- 母 ウソおっしやい。精一杯やってれば、もっと成績が上がるはずよ。努力が足りないのよ、努力が！ あなたねえ、「この時期になってこの成績じゃ、高嶺高校はまずムリです」って今日言われたのよ。あなたもそれは分かってるでしょう？
- ゆかり お母さん。わたしには高嶺高校なんてムリよ。あんな進学校じゃわたしについていけないわ。それにわたし、大学にはあんまり行きたくないの。働いてみたいわ。
- 母 何を言ってるんですか！ 今どき短大ぐらい出ておかないと、いい人と結婚できないわよ。そうしたら苦労するのはあなたなのよ。
- ゆかり そんなのわたしの勝手でしょ。どんな人と結婚しようとわたしの決めることだわ。
- 母 ゆかり、あなたはまだ子供なの。世の中はそんなに甘いものじゃないわ。お母さんはあなたのために思って言ってるのよ。
- ゆかり もうイヤ！ そんな恩着せがましい言い方やめて！ “わたしのために思って言ってる”なんてウソよ。あんたはただ自分ができなかったことをわたしにさせようとしてるだけよ！
- (効果音) (母の平手打ち)
- 母 なんて口を利くの、この子は！ 母さんはそんなふうにあなたを育てた覚えはないわよ。

ゆかり もうたくさん。わたしはあんたの操り人形じゃないわ！

母 親の言うことが聞けない子は出ていきなさい。家には入れないわ。

ゆかり ああ、言われなくても出て行ってやるわよ。あんたの顔なんか二度と見たくない。

(効果音) (激しくドアの閉まる音)

母 ゆかり、赦ゆるしませんよ！

(音楽) (ブリッジ 回想終わり)

(効果音) (街の雑踏)

ゆかり(モノローグ) そう。わたしにはあの学校はムリだ。それなのに無理やり押し付けるあの人がいけないのよ。…あーあ、人がいっぱいいるなあ。みんな何を考えて生きてるのかしら？ 無表情で歩いている人、恋人同士で寄り添っている人、暖かそうな毛皮のコートを着てるおばさんたち。でもみんなわたしには関係ないわ。ここでわたしが叫んだって、だれもわたしの気持ちなんて分かってくれない。だれもわたしの味方なんかしてくれない。こんなに人がいっぱいいるのに…。わたし、独りぼっちだ。本当に独りぼっち。だれかわたしの気持ちを分かって。わたしを受け入れて！

男 へイ、彼女。同士たんだい、悲しそうな顔して。おれが慰めてやるよ。

ゆかり だれ、あんた？

男 そんなこたあどうだっていいじゃんかよ。もう夜も遅いんだしさ。お茶でも飲もうぜ。おごるからよ。

ゆかり あんたのような人に話すことなんてないわ。ほっといてよ。警察呼ぶわよ。

男 正月早々穏やかじゃねえな。お宅だってこんな夜遅くに一人で歩いているからにゃ、まんざらでもねえんだろ？

ゆかり うるさいわね。「あんたのような野良犬には用はない」って言ってるでしょ。ほっといてよ。

男 なんだと、この野郎！ おとなしくしてりゃ付け上がりやがって。

ゆかり 何するのよ。放してよ。人を呼ぶわよ。

男 呼べるものなら呼んでみな。だれも来やしないぜ。おとなしくこっちへ来な。

ゆかり やめて。だれか！ 痴漢よ！

男 うるせえ。この野郎！

(効果音) (男、平手打ち)

ゆかり キャー！

男 こら待て。逃げられると思うなよ。

(効果音) (ゆかり、夢中で逃げる)

ゆかり(モノローグ) イヤ、助けて。だれか、だれかいらないの？ お母さん！

ナレーション ゆかりは、必死で雑踏の中に逃げ込みました。男は人目を気にしてか、もう追

ってきませんでした。

ゆかり(モノローグ) あきらめたのかしら。でもまだつけられているような気がする。もうイヤ、こんな街。

ナレーション ゆかりは、逃げるように電車に乗り込みました。

(効果音) (電車内)

ゆかり(モノローグ) どうしよう。家へ帰ろうか。ダメ、家になんか今更帰れない。泊まる所もないし…。

金井先生 木村さん？ 木村ゆかりさんじゃない？

ゆかり はい。

金井先生 ああ、やっぱりそうだ。“どうも見たことのある人が乗ってるな”と思ってたのよ。どうしたの、こんな遅くに一人で？

ゆかり …教会学校の時の金井先生？ そうですね？

金井先生 そうよ。覚えていてくれた？

ゆかり はい。

金井先生 木村さん。何か訳がありそうね。お母さん、あなたがここにいること知ってるの？

ゆかり え？…

金井先生 ははン、やっぱりそうか。知らないのね。せっかくのお正月だというのに、お母さんとケンカでもした？

ゆかり …。

金井先生 ダメじゃないの。早く帰らないと。お母さん心配してるわよ。

ゆかり わたし、あんなところ帰りたくない。

金井先生 …よっぽどのことがあったのね。いいわ、先生が話聴いてあげる。

ゆかり 本当？

金井先生 もちろんよ。でもね、そのためには、まずお母さんに電話をしなくちゃ。それこそ死ぬ思いで心配してるわよ。

ゆかり え、そんなことしたら連れ戻されちゃう。それに、心配なんかしてないと思うし。

金井先生 そんなことないわよ。大丈夫、先生に任せておきなさい。とにかく降りましょう。

ナレーション ゆかりは電車を降りると、電話をしている先生の横顔を不安そうに見つめながら待っていました。

金井先生 大丈夫よ、ゆかりちゃん。「とにかく2、3日、わたしが預かりますから」って言ったら、ようやく納得してくださったわ。お母さん、心配して搜索願まで出したそうよ。とにかくわたしのアパートへ行きましょ。

ナレーション ゆかりは、先生の家へ着くまで、まるでせきでも切ったように、今まであったことや、自分が行きたいと思っている高校のことなどを話し始めました。そして家に着いてからも、家出をしてしまって寂しかったこと、本当はお母さんの気持ち

も分かるのだということなど、時間のたつのも忘れて話したのです。

金井先生 ...そうだったの。ゆかりちゃん、しばらく見ないうちにずいぶん成長したのね。話は大体分かったわ。いい？ あなたは「わたしはお母さんの操り人形じゃない」って言ったわよね？ それに「わたしはわたし。お母さんのために生きてるんじゃない」とも言ったわ。

ゆかり はい。

金井先生 それじゃだれのために生きるの？

ゆかり だれのためって...。自分のためだし、結婚したら彼氏のためとか、子供のためとか...。

金井先生 そうよね。確かにそうだわ。でもね、その人たちが死んだりして皆いなくなってしまったら、だれのために生きるの？

ゆかり え？ うん、やっぱり自分のためかな。

金井先生 うん。結局そうよね？ 自分のため。人間はだれかのために生きているつもりでも、結局は自分がかわいくて、自分にとって役に立つこと、自分のためになることを本能的に求めているのよ、心の中では。だから、その自分がだれかに邪魔されると、猛烈に反発するわけ。先生もそうだったもの。

ゆかり え、先生でも？

金井先生 そうよ。ちょうどあなたぐらいの時、とにかく「自分が、自分が」って突っ張って自己主張してたの。親にも先生にも友達にも。そうしないと、自分が自分でなくなるみたいで、不安だったのね。

ゆかり ふーん、なんだかわたしみたい。

金井先生 でしょ？ だから先生、分かるわよ、あなたの気持ち。ところがね、忘れもしない高1の時、英語の弁論大会があってね、英語自信あったんで、絶対選ばれると思ってたのが、ダメだったの。それでわたしの代わりに選ばれた人に、「あんたなんか」って食ってかかったら、英語の池田先生、いつもはクリスチャンで優しい先生だったんだけど、その時、一喝されちゃった。「いい加減にしろ。地球はお前のために回ってるんじゃない！」って。ショックだった。

ゆかり ふーん。わたしもそう言われたかもしれないな、その時いたら。

金井先生 でね、その先生、「金井、お前、そんなに英語やりたいんなら、これ読んでみる」って貸してくれたのが、.....なんだと思う？

ゆかり？

金井先生 英語の聖書。恐る恐るあけて最初に読んだのが、「イン・ザ・ビギニング ゴッド・クリエイテッド・ザ・ヘヴン・アンド・ズィ・アース」っていうの。

ゆかり 「イン・ザ・ビギニング、ゴッド...」えーと、「初めに、神が、何とかと、地球を...」あ、あれだ！ 創世記1章1節！ 「初めに神が天と地を創造した。」

金井先生 そう、よく覚えてたわね。あれよ。初めて読んだんだけど、なんか、すごく強烈

だったの。その時のわたしは、全部自分が中心だったでしょ。でも聖書は、神が世界を創造したって。その感激を池田先生に話したら、「お前の心の不安や焦りは、この創り主を知らないで、離れているところから来てるんだ」って。それがきっかけで教会に行くようになって、イエス様のことを知って、...それであなたの知ってる今のわたしがあるわけ。木村さん、忘れないで。「イン・ザ・ビギニング ゴッド」よ。

ナレーション

ゆかりは、その夜、金井先生と夜の更けるのも忘れて話しました。そして今、自分が、見えない神様の大きな手の中に包まれているような、不思議な心の安らぎを覚えながら、いつしか深い眠りに就いたのでした。

<完>